

軽度発達障害のある子どもたちの 特性と支援

北海道大学大学院教育学研究科教育臨床講座教授

田中康雄

こんにちは、田中と申します。私は児童精神科の医師をしておりますので、本日は、演題の「軽度発達障害のある子どもたちの特性と支援」のうち、特に前半の「特性」について時間の許す限りご紹介しようと思います。具体的な特性に応じた支援等々については、なかなか時間の都合もあり細かく言えないということと、後ほど小・中そして養護学校における支援が事例として語られますので、そちらの方で置き換えていただこうと思っております。先ほど斎藤先生がおっしゃっていただいたような専門性について、そしてそのつなぎ方の部分を少しお伝えして、何とか時間内に収めようと思っております。

軽度発達障害を理解するための基本事項

心理・社会的要因と自尊心の喪失

斎藤先生にも触れていただきましたように、特別支援教育の一つの対象として、「軽度発達障害」という言葉がクローズアップされています。この言葉自体は医学的な用語ではありません。これからお話しする幾つかの見落とされやすい、見誤りやすい発達障害と考えられるグループ

スライド1

の一応の総括、総称というような言葉として使われております。

そして、軽度発達障害というのが、ここ（スライド1参照）にありますように、現時点では中枢神経系すなわち脳の発達のアンバランスさであることを、まずは前提として確認しておきたいと思っております。では、その発達のアンバランスはどのように証明され、どのように検討されているのかということになりますと、まだまだわれわれの医学的な探索はそこまで進んでおり

軽度発達障害の基本的事項

- 軽度発達障害は、中枢神経系の障害であるが、その症状形成過程に、心理・社会的要因の関与が大きい
- この障害のもっとも有害な影響は、自尊心を失うことである